（信実）は人望がなく将器に乏しいから小三郎を城主に迎えたいと思い、そのことを毛利元就に相談して承諾を得たと言う。しかし武田の有力家老が敵である元就の承諾を得たとはどういうことであろうか。あるいは元就の手が密かに光景に回り、元就に通じていたのかも知れない。

次に熊谷氏も元は関東御家人であり、やはり承久の乱の功によって安佐北区三入（みいり）の地頭職を賜わった。源平の一の谷の合戦で平敦盛を討った熊谷直実の子孫と言われている。安佐北区可部を流れている太田川支流の根の谷川の左岸にある高松山が居城であった。

熊谷元直の跡目は信直であり、南北朝時代から武田のもとで有力家老として仕かえ、武田光和と水魚の交わりをしていたという。そのため光和の側室として妹を嫁がせていたが、光和との関係が思わしくなく、出戻りしたことが信直と光和の関係が悪化した原因であろうか。しかし信直の高松山は毛利元就への備えであったので元就はなんとかして信直を籠絡したいと思っていたに違いない。毛利家は風見鶏のように武田、尼子、大内など、その時々の強者に従っていたが、大内義興へ寝返ったとき恩賞として可部の広大の領地を貰い受けた。

元就はその領地を熊谷直実籠絡の手段に使うことにし、代償として武田光和からの離反を求めた。信直がこれに応ずると、光和が怒って攻め込んできた。しかし信直はもともと家老であったので光和の将兵の意気が上がらず、光和は再度攻めようとしたが元就が高松山の後詰をする動きを示したことから、ついに断念せざるを得なかった。信直の離反は天文二年のことと思われるが、有力家老の離反は武田に決定的な打撃を与えた。

武田の家老衆には品川信定、香川行景、熊谷元直、己斐（こい）直道（宗瑞）、粟屋氏、伴繁清、白井氏など大勢いた。伴氏は武田の分家であり、家老衆の多くが武田と姻戚関係にあったと思われる。そのなかでも熊谷元直が毛利元就との有田合戦で最初に戦死し、強硬派の香川、己斐両氏は武田元繁を討ち取って油断している元就を討つため出陣して返り討ちにあったと言われている。思うに鎌倉時代の昔から武田は武辺者として戦力はあったが、武田信玄を例外として謀略を仕掛けることが不得手であったように思われる。　以上

エッセイ

名物「秋田了戒」

原　靖雄

江戸時代の中期、八代将軍吉宗が刀剣鑑定家の本阿弥に命じて『名物牒』（享保名物帳）なるものを作らせた。これは将軍家および各大名家に伝わる由緒ある刀剣の優品を選び、記したものである。選ばれた総数は約一七〇口であり、そのうち現存するもの約一〇〇口である。現存するものの大部分は国宝または重要文化財に指定されている。

名物には由緒となる名前がつけられていることが条件になっているが、その多くは持ち主をつけたものとなっている。例えば、五郎入道正宗作で石田三成所持の「石田切込正宗」（重要文化財）などがある。その他では、身幅が広く菜切り庖丁に形状が似ているところからつけられた「庖丁正宗」（国宝）などもある。

短刀で「秋田了戒」（重要文化財）という名物がある。山城鍛治・了戒の作で秋田城之介が所持していたのでその名がついた。享保の頃は加賀の前田家にあったが、現在は個人の蔵品となっている。その作品は「鵜の首造り」という異風な造り込みで、つまり、手元が刀で先が剣のような出来で、遠くからでも一目で見分けがつきやすい。その秋田了戒とそっくりなものを展示即売会で見つけた。

昭和四十一年十一月、銀座松坂屋で即売会があるので覗きに行った。刀剣の勉強をはじめてまだ四、五年しか経っていなかったので、とても現物を買うところまで達していなかった。仲間うちの集まりがあったときなど、

「刀を買うときには、先輩の目利きに一緒についていって貰いな」とよく言われていた。会場には五十振ほども並んでいただろうか。その中には重要文化財の「後藤正宗」が千五百万円で中央に飾ってある。順繰りに見ていくうち、会場の一番奥まったところに、それ